

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 交渉紛争解決学領域
氏名 寺岡 祥子

【論文題目】 子ども虐待の発生予防に関する研究

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

寺岡祥子氏の論文「子ども虐待の発生予防に関する研究」は、子ども虐待の発生予防策としてどのような対策が効果的であるかを具体的に示すことを目的とするものである。2000（平成 12）年に「児童虐待の防止等に関する法律」が制定された後、これまでに「児童福祉法」と合わせて 4 回の大きな改正が実施されてきたが、これらを通して、子ども虐待については、発生予防、早期発見・早期対応、虐待を受けた子どもの保護と自立に向けた支援を核とする総合的な対策が推進されてきた。しかし、2010（平成 22）年の中間評価報告書では、取り組みの重点項目とされていた「虐待による死亡数」は横ばい、「法に基づき児童相談所に報告があった被虐待児数」は大幅に増加、「子育てに自信が持てない母親の割合」はわずかに減少という状況であることから、指標となる項目において一向に改善傾向が示されていないとされた。この点を踏まえて、氏は以下のように論を組み立てる。

第 1 章「子ども虐待の現状」では、日本における子ども虐待防止に関する法制度と子ども虐待の現状について、また、虐待が発生しやすい状況について分析している。その上で、子ども虐待防止対策先進国における子ども虐待の取り組みを概観し、日本の子ども虐待防止対策との視点の違いを分析している。日本における子ども虐待の多くは、外部の目が届きにくい家庭内で、0～3 歳の低年齢の子どもに対して実母または実父母によって引き起こされている。その主因として考えられるのは、子育てに伴うストレスや親子の愛着形成に関わる問題ではないかと氏は見る。

第 2 章「子ども虐待防止対策の現状」では、現行の子ども虐待防止対策について検討し、特に 0～3 歳の低年齢の子どもに対する対策として有効かどうかを問題にすることを通してその課題を明らかにしようとしている。その上で、現行の対策が不十分であるのは、子ども虐待を生む要因の一つと考えられる子育てを担う母親の孤立が、現代社会においてますます深刻さを増しているからではないかと氏は見る。また、子ども虐待の発生予防には、望まない妊娠の防止が一つの大きな課題ではあるが、望まない妊娠をした人でも安心して子どもが産める社会であれば、子ども虐待は減少するであろうと氏は言う。

第 3 章「子ども虐待の発生予防」では、社会全体で子どもを育てる方法として、保育所の入所待機児童の解消や施設入所、里親による養育といった対策を進めることは、子ども虐待防止対策としては有効であると考えられるが、子ども虐待の発生予防に最も効果的な対策は、生まれてくる子どもとその母親が安定した母子関係を形成して、その関係を継続できるような仕組みを作ることであると氏は言う。そのような仕組みにおいて中心的役割を担う者として、母子の最も身近にいる専門職と考えられる助産師を取り上げ、助産師がその仕組みをどのように効果的に支えていくことができるかについて、助産師に本来求められる役割を踏まえて論じ、子ども虐待の発生を予防するための一つのモデルを示そうとする。

予備論文の段階で課題として指摘された点に関しては、以下のような改善が見られた。1) 子ども虐待の現状分析の根拠となる信頼できるデータの提示に努力するとともに、データ収集に関する問題点を整理している。2) 現行の子ども虐待防止対策のどこに問題があるかをより明確にするために、議論の組み立てを整理し直し、論点を整理している。3) 氏の考える「子ども虐待の発生予防に最も効果的な対策」が期待するような効果を実際に発揮し得るかどうかに関して、十分説得的とはいえないにしても、有力な論拠となり得る材料を提示している。

以上の所見により、学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成27年1月28日（18：15～19：30）、文法棟応接室において、口述試験を実施した。

また、上記の者は、同年1月31日（13：00～14：00）、文法棟A2教室において、学位論文について公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分であると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査	岡部	勉
委員	渡邊	功
委員	菊池	健
委員	石原	明子
委員	大西	克智